

SONRISA

# そんりさ

vol. 163



ニカラグア、解放の神学。ミサでは50年前から歌をうたってきた

ニカラグア  
解放の神学30年

02	ニカラグア 解放の神学 30年	……………藤井 満
06	メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2017~ベラクルス (その2)	……山本昭代
09	ニカラグア・リオココ先住民女性フォーラム	……………新川志保子
11	私たちの要求を体現するアフリカ系の代表者が必要	……………大西裕子訳
13	『種子』みんなのもの?それとも企業の所有物?	……………印鑰智哉
14	ラ米百景「フィデル・カストロは独裁者か」	……………伊高浩昭
15	ペルー音楽 フレディ・グスマン、ジャズとアンデス音楽の彼方…	…水口良樹
17	メキシコの食巡り トウモロコシのスープ	……ミゲル・アクーニャ
18	ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み	……………小林致広

2018年1月13日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

## ■内戦中

1988年、内戦中のニカラグアは、屋根まで乗客を満載したおんぼろバスや床に穴が開いたソ連製タクシーが走っていた。スーパーマーケットの棚はほとんど空っぽ。ビニール袋が貴重品で、日本のスーパーのレジ袋をみんな欲しがった。

サンディニスタ政権を支援するため首都マナグアに住んでいた日本人女性に、ホームステイ先を紹介してもらった。

1979年の革命では、「解放の神学」のキリスト教基礎共同体が重要な役割を果たした。マナグア郊外にある「9月14日」地区周辺には「サンパブロ・アポストル教区」という共同体が組織されていた。私がホームステイしたバルデス一家のラファエルとカルメン夫妻は、そのリーダーだった。

日曜日のミサの後は、薬草講座が開かれた。米国による経済制裁で、医薬品が不足していたからだ。刑務所や病院を慰問し、保守派のカトリック司祭に抗議するデモも組織していた。

娘のタティアナの15歳の誕生日には、教会でうたうバンド「ファミリア・ガロ」が音楽を奏で、近所の人たちが集まって踊り騒いだ。

マナグアにはもうひとつ、多くの外国人が訪れる基礎共同体があった。リゲロ地区という貧しい地区にあるサンタマリア・デ・ロスアンヘルス教会が拠点だった。

極彩色の壁画には、スペイン人の侵略に抵抗した先住民族の英雄や米国の支配に抵抗したサンディーノ、FSLNの創設者のカルロス・フォンセカからのほか、無名の民衆が巨大な十字架を背負って歩く姿が描かれている。キリ

スト像やマリア像は両端から民衆を見守る形になっていた。ウリエル・モリーナ神父は、聖書の一節を引用しながら、平和な社会を今この場でどうつくっていくかを説いていた。

ハリケーンによってカリブ海側で大きな被害が出ると、キリスト教基礎共同体が呼びかけてボランティアの若者が派遣された。8割の家の屋根が吹き飛ばされ、人口の4分の1がマラリアに罹患したブルーフィールズ市で家屋の再建を手伝った。

学校に寝泊まりして、水道がないから屋根から流れ落ちる雨水でシャワーを浴びた。クリスマスにはラム酒を回し飲みして、ギターやハーモニカで夜更けまで踊った。夜空には自動小銃の曳光弾が花火のように飛び交っていた。モノはなくて貧しく、先が見えない内戦にうんざりして政権の支持も揺らいでいたけれど、ボランティアに参加する基礎共同体の若者の間では、連帯感と恋と笑いがあふれていた。



解放の神学の関係者らが中心になって企画した平和行進。日本山妙法寺の笹森さんも参加(1988年)



ハリケーンで壊滅的被害を受けたブルーフィールズで家を再建するボランティア活動(1988年)



タティアナ15歳のパーティ。ギターを弾いているのがフラジオ・ガロ。右隣テオ神父

極彩色の壁画に彩られたサンタマリア・デ・ロスアンヘルス教会

## ■サンディニスタ下野

1990年、内戦終結にともなう大統領選で、FSLNのダニエル・オルテガは、野党UNOのビオレッタ・チャモロに敗れて、下野した。来日したこともあるファミリア・ガロのリーダー、フラビオ・ガロは1994年、妻の目の前で強盗に射殺された。

1996年と2002年に再訪して「9月14日」を訪ねると、サンパブロ・アポストル教会では、ラファエルおじさんが司会をしてミサを営んでいた。

1992年に赴任した保守派の神父は、ガロー家たちが歌い継いできたミサ・カンペシーナ（農民のミサ）を認めず、住民と争いが起きた。1993年には神父が引き揚げ、制度上の教区は解体された。それ以来、住民たちが自主的にミサを開いているのだ。

極彩色の壁画があるリゲロ地区のサンタマリア・デ・ロスアンヘルス教会も保守派の神父にかわり、共同体の人々は、公民館のような小さな家で自主的なミサを催していた。

私が訪ねた日はクリスマス会だった。旧知のオランダ人神父テオ・クロンベルもいる。彼は若いころチリにいたが、1973年の軍事クーデターでアジェンデ政権が倒れて脱出し、しばらくしてニカラグアに来た。

保守派の圧力で神父がいなくなった基礎共同体や、戦争犠牲者の追悼式典などを手伝っていた。収入がないから、新聞を配達することで生活費を稼いでいるという。「配達はいろいろな人と接点をもてるから、ちょうどいいんだ」と笑った。

クリスマス会に集まったのはお年寄り30人ほど。デモ中に警察官に撃たれて殺された学生を追悼するため、「私たち革命的クリスチャンは若い仲間の死を……」と語って黙祷した。儀式が終わると、プレゼント交換や福笑い、踊りを楽しんだ。



1996年リゲロ地区の共同体のクリスマスパーティ

パーティに参加したテオ神父とソコロおばさん

リーダーのソコロおばさんは、医療も教育も有料化し、バス運賃も値上げして生活が悪化しているのに、保守派と手を結んで「平和的手段で」などと訴えるサンディニスタ幹部たちが許せないという。

「何年も投獄されて命をかけて闘ってきたことを忘れてしまったのね。ダニエル（オルテガ）はサンディニスタじゃなくてサンディネーロ（dineroはカネの意味）よ。本当のサンディニスタは、私たちのような草の根に残っているだけ」

革命前からゲリラ活動を支援してきた彼女たちでさえ、サンディニスタを見限ろうとしているのだった。

## ■二度目のサンディニスタ

2006年の選挙でFSLNのダニエル・オルテガが大統領に返り咲いた。チャベス大統領（当時）のベネズエラから石油の支援を受けて経済が回復し、医療費の無料化や、貧困層を助ける融資制度の創設など、ポピュリスト的な政治を展開することで、2011年と2016年にも当選を果たした。

2017年5月、15年ぶりにニカラグアを訪ねた。マナグアのまちを歩くとあちこちにチャベスの肖像が掲げられ、スポーツ施設や商業施設にも「チャベス」の名がついている。

旧国家宮殿の正面には、1988年にはカルロス・フォンセカとサンディエーノの肖像が飾られていたが、サンディニスタの野党時代には消えていた。今回、2人の現代風の肖像が復活していた。



2017年 あちこちにチャベスのモニュメントが建っている

1988年の国家宮殿。サンディエーノとカルロス・フォンセカの肖像が飾られている



1996年には肖像画撤去

2017年、2人の肖像画が復活

英雄をまつるモニュメントが新たにつくられ、2012年に死んだトマス・ボルへの名も刻まれている。湖畔のレジュー施設には、クーデターで殺されたチリの大統領サルバドル・アジェンデの名がついている。ニカラグアのみならず、ラテンアメリカの左翼の英雄が、一堂に会している。英雄によって国民の統一をはかろうとしているかのようだ。

まちで会う人の多くは、「夫婦で大統領と副大統領なんて考えられるか?」「ダニエル（オルテガ）の次は奥さんが大統領だ。オルテガ王国だよ」と、政権の腐敗を批判するが、彼らでさえも「経済は悪くないし、麻薬マフィアもないから、昔に比べられました」と言う。ベネズエラ情勢が混沌としているため、将来は見通せないが、経済や治安についての評価は総じて高い。

隣国のエルサルバドルやホンジュラスは麻薬マフィアが浸透して世界有数の殺人事件多発地帯だが、ニカラグアは革命政権時代に整えた警察や隣組組織があるせいか、良好な治安を維持している。そのため、エルサルバドルから移住する人や、工場を移す外国企業が増えているという。

サンタマリア・デ・ロスアンヘルズ教会を訪ねると、幾何学模様の床は真っ白になり、壁画の一部は白い布で覆われ、わきにあったキリスト像が中央に鎮座している。壁画の破壊を懸念して、作者のイタリア人が訪れて神父に保存を訴えていた。

この地区の基礎共同体のリーダーだったソコロおばさん（82歳）は、足が不自由だから、今は共同体の集まりには参加していない。「ニカラグアの土になる」と語っていたオランダ人のテオ神父は、2013年に亡くなった。内戦時代に外務大臣をつとめ、日本に来たことも



2017年、白い布で壁画は隠され幾何学模様の床もなくなった

あるミゲル・デスコト神父は、私の滞在中に死んだ。ひとつの時代が終わりつつあるように思えた。

15年前、FSLNの幹部を「サンディネーロ!」と吐き捨てていたソコロおばさんに現在のFSLN政権の評価を聞くと、屋根のトタン板の無料配布や、商売をはじめるときの無利子融資制度などをあげ、「生活も治安も右翼政権のときに比べたらずっとよくなったよ」と言った。

基礎共同体の仲間と一緒に40年前に植えたモリンガ（ワサビの木）の葉を乾かした茶をつくり、革命直後のワークショップで覚えた大豆のシリアルやパン、豆腐を売って暮らしているという。

## ■歌う共同体

「9月14日」地区のバルデス一家を訪ねると、「あした、共同体結成51周年のミサがあるよ」と誘われた。「サンパブロ・アポストル教区」はニカラグアでもっとも古いキリスト教基礎共同体であり、ここから全国に解放の神学が広まったのだという。何度も訪ねていたのはじめて知った。

1961年にスペイン人の若手神父ホセ・デ・ラ・ハラが、音楽の教師としてマナグアの神学校に赴任した。その生徒のなかに、後に国民的な歌手になるカルロス・メヒア・ゴドイもいた。ハラ神父は、貧しい地区に教会をつくりたいと志願し、1966年にバラックが建ちならぶ「9月14日」地区周辺に「サンパブロ・アポストル教区」をつくって赴任した。

第2バチカン公会議（1962～65年）で、基本的人権や社会正義を推進する主体として教会が位置づけられたことで、同様の教区があちこちに生まれた。サンタマリア・デ・ロスアンヘルズ教会があるマナグアのリゲロ地区も、農漁民が描く素朴画で有名なニカラグア湖のソレンティナーメ諸島の基礎共同体も、サンパブロの人々の手を借りて誕生した。

ハラ神父らは、オリジナルの歌をうたうミサを催すパナマの教会を視察し、自分たちも歌をつくることにした。音楽家に相談しながら、Misa Popular（民衆のミサ）という歌で紡ぐミサを生みだした。これらの歌をもとにして、メヒア・ゴドイは後にMisa Campesina（農民のミサ）をつくった。

共同体はパウロ・フレイレの思想の影響を受け、「見て、判断して、行動する」という柱をかかげてきた。清掃や衛生活動からはじまり、識字活動を手がけ、1970年ごろにはバス運賃の値上げに反対するデモや運行を阻止する活動を展開した。1974年になるとFSLNのゲリラを受け入れ、協同しはじめた。

サンパブロ・アポストル教区のニカラオ地区に住むガロー家は、「ファミリア・ガロ」として教会で歌い、芸術家の立場でソモサ独裁政権とたたかうグルーポ・グラダという団体に参加した。そこで、カルロス・メヒア・ゴドイや、後にオルテガ大統領の妻となる詩人のロサリオ・ムリージョらに出会った。

ソモサ独裁政権の不正を告発する歌をうたうから、教会でも周囲に気を配り、国家警備隊が来ると逃げ出した。1979年6月には、FSLNのゲリラに参加した兄弟のノルマンが戦闘で負傷し病院に搬送されたが、周囲を国家警備隊が見張っていた。警備隊員が食事に離れた一瞬をついて、顔見知りの医師と看護師がベッドごと運び出してくれた。

1979年6月に一斉蜂起の指令が下ると、舗装のブロックを引きはがしてバリケードをつくり、国家警備隊の侵攻を防いだ。7月14日、ソモサは国外に逃亡して革命が成功した。

共同体51周年の集会で、以前に神父だったスペイン人のフェリックス・ヒメネスがそんな歴史を語った。彼は一斉蜂起の際、スペイン大使館から避難を勧告されたが、教区に残り、革命成就の場に居合わせた。フェリックスは1983年に信者の女性と結婚して神父をやめた。

ラファエルの息子エドアルドのギターでミサの歌をうたって、式典が終わると、食事とフィエスタだ。ラム酒を飲みながら汗だくになって踊った。

保守派の圧力で解放の神学の共同体は次第に減り、常時50人ほどが集まるこの共同体でも、若者は数えるほどで、高齢化が進んでいる。でも、個々の信者がバラバラに信仰するのではなく、共同体で協力し合って神の意志を現実の社会に実現するという解放の神学は、個人が疎外され、人間関係が希薄になっている現在の日本でこそ、必要なのではないかと思えた。



2017年51周年、ギターに合わせてミサの曲を歌う



2017年 式典後のフィエスタ

翌日、亡くなったフラビオ・ガロの妹エリザベスらが設立した「フラビオ・ガロ マリンバ・ギター学校」を見学した。

フラビオは異文化を尊重するからどの国の人にも好かれた。日本では、ほかのメンバーはスキヤキの生卵を口にできなかった。「失礼なことをするな」と怒り、生卵を6つ食べて、激しく嘔吐したという。

フラビオは音楽学校をつくってマリンバをニカラグア中に広めることを夢見ていた。その遺志を継いで、エリザベスは1996年に自宅で学校を開いた。最初は、マリンバは2台だけで、1台は日本からの寄付で購入した。いまマリンバは36台を数え、200人の生徒がいる。貧しい生徒70人には奨学金を支給している。

エリザベスの家で昼食に招かれた。「やあ、昨日も会ったね」と手を差し出した彼女の夫は、元神父のフェリックス・ヒメネスだった。



マリンバ学校の講師たちの練習風景



元神父フェリックス（左）とフラビオ・ガロの妹エリザベス

# メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2017

## ベラクルス（その2）

山本昭代

2017年9月に訪れたメキシコ・ベラクルス州での話の続き。港湾都市ベラクルス市郊外の「サンタ・フェの丘」という名の新興住宅地に隣接する土地で見つかった大規模な秘密墓地では、これまでに300体近い遺体が発見されている。その発掘作業を行っているのが、地元の方不明者家族の会「ソレシート」である。私はその発掘現場に5日間通い、作業を手伝いながら、メンバーらに話を聞かせてもらった。

### 強制連行された理由は？

午前中の作業が終わり、昼食後に休憩しているソレシートの女性たちに話を聞かせてほしい、と声をかけた。

現場のリーダー格のジャネットは、兄弟のひとりといとこ2人、姉妹の夫など親族が計6人も行方不明になっている。その6人が一緒に車に乗っているところを連行されていったという。2014年5月のことだった。しかし彼女は、「話がややこしいので話したくない」という。会のメンバーの中には、マスコミの取材を快く思う人ばかりではない。名前が出ると、脅しが来る可能性がある。さらに被害者なのに、「何か悪事にかかわっていたせいだ」と決めつけられることもしばしばなのだ。

もうひとりのクララは、2010年に当時50歳だった夫が、自宅から武装集団に連れて行かれた。夫は港湾労働者で、港で自動車などの荷の積み下ろしをしていた。なぜそのような目に遭ったのか、理由は何もわからない。警察に行っても相手にされなかった。妹も、息子が行方不明になり、探している。ソレシートは妹が紹介してくれた。

クララの悲劇はまだ続いた。1年前、建設労働者として働いていた当時22歳の息子が、白昼、無理やり車に押し込められ、連れて行かれたのだ。その近所では、同じように強制連行される若者が続けて出ているが、いずれも理由はわからないという。一部始終を目撃してい



発掘作業の合間に靴を手編みするクララ

た人もいたが、証言はしたくないといわれた。3日後、身元不明死体が見つかったという新聞記事が出た。もしやと思って行くと、それが変わり果てた息子だった。「バラバラ死体というものがどういうものか、初めて見た」。

息子は、幼い子どもを3人も抱えていた。その子どもたちもクララの家に来て一緒に暮らしている。発掘現場に来ているときでも、少しでも収入を得るために、クララは暇を見つけては手編みの靴を編んでいた。片足を編むのに1週間くらいかかるが、売り値は1足200ペソ（約1600円）。女性の仕事はなんと安く買いたたかれることか。

### 検視官による発掘作業

翌日、再びサンタ・フェの現場を訪れると、検視官のグループが来ていた。前日に見つかった遺体を掘り起こすため、連邦司法警察と州司法警察からそれぞれ5人ずつが派遣されて来ていた。検視官の作業現場には立ち入り禁止テープが新たに張られ、ソレシートのメンバーも立ち入ることができない。検視官らは白い防護服で全身を覆い、顔にはマスクをして、蒸し暑いなか、遠目に見ても息苦しそうだった。

この日は、黄色いテープの外側を掘ること



白い防護服で現場に入っていく検視官ら

になった。しばらく作業をしていると、またドン・ルーペが呼ばれた。老人は真剣な表情で鉄棒に鼻を近づけ、うなずくと、スコップで掘る作業が始まった。その傍らでは、場所を変えながら探査棒を打ち込む作業が続く。どちらも汗だくの重労働だ。日本人としては、機械を導入して作業を効率化できないものかと考えてしまう。メンバーにたずねてみると、実際には難しいのだという。探査棒を打ち込むのも、手作業でしか感じられない異物感がある。石や木の根に当たったときと骨に当たったときでは、棒の感触が全然違う、というのだ。発掘作業も、遺体を損傷してはいけないので、手作業でやるしかないようだ。

検視官による発掘作業がほぼ完了し、掘り出されたものを整理しているのが遠目に見えた。茶色い、大腿骨とおぼしい太くて長い骨。長さからみて、大柄な男性だったのだろうか？

午後、ソレシートのメンバーに発掘物の確認に来るようにと声がかかった。メンバー2人と付き添いの人権委員のみ。当然、私は立ち入り不可。マスクをして現場に入っていくクララたちを見送り、10分後に戻ってきたところで話を聞くと、全身の骨格と、下着と靴下、Tシャツが見つかったという。性別は特定できないようだ。

## セリアとマリア

週末をはさんで、サンタ・フェの発掘現場3日目。この日、ソレシートのメンバーは、ジャネットとクララに加えて、セリアとマリアという女性2人も来た。

セリアは、6年前の2011年、息子のアルフレッドが行方不明になった。当時33歳で、妻

と3人の幼い子どもたちと暮らし、働きなが勉強して大学を卒業したばかりだった。政治に関心を持ち、地元の政治家の支援をしていた。その日は、政治家の息子に付き添って、その人が売ったばかりの車の書類を取りに州都のハラパに行ったきり、2人とも帰ってこなかった。政治家の自宅のほうには身代金要求の電話が来たという。しかし息子の妻は電話番号を変えてしまったので、犯人の側から接触はなかったようだ。

息子の妻は恐怖を覚えてか、探そうとしないので、セリアがひとりで息子を探している。あちこちに足を運び、いろいろな人に話を聞いたが、誰も何も話してくれない。「不可解なことが多すぎる。きっと政治がらみで、誘拐した者たちは権力に結びついているにちがいない」という。

ソレシートには1年前から加わった。ここに来てから、学習会などで法律や制度について知識を得ることができたという。

「もう6年も探し続けて、疲れた。それでも、いつか息子が戻ってきたとき、母はずっと探していたよ、と言ってやりたい」と、涙を浮かべた。

マリアの行方不明の息子、フランシスコは、2年前に23歳の時に行方不明になった。ベラクルス市の南のボカ・デル・リオ市に暮らしていたが、友人から助けを求められ、タクシーで探しに行ったきり、友人も息子も戻らなかった。誰も何も見ていないといい、友人の家族も何もわからないという。警察に届け、息子のほかの友人たちにたずね、もしやと病院を訪ねて回ったりもしたが、何の手がかりもえられなかった。



スマホにずっと持っている息子の写真を見せてくれたセリア



仕事と発掘作業を両立させたいというマリア

フランシスコは中学を終えた後、専門学校を出て、靴屋で働いていた。母親になにかにつけ連絡をしてくる、陽気でやさしい青年だった。ボカ・デル・リオ市の中心街で恋人と暮らしていたが、その周辺では同じように行方不明になる若者が何人も出ていた。うわさによると、犯罪組織が若者を奴隷として働かせるために強制連行して行くのだという。

ニュースでこの会の存在を知り、8か月ほど前から来るようになった。それまでは縫製の仕事をしていて、この現場に来ると収入を得る仕事ができない。午後、自宅に帰ってからできる仕事を探している、という。

私も現場作業にだんだん慣れてきて、スコップで穴を掘る作業も手伝わせてもらった。5分も掘ると、汗が噴き出す。そのとき、何か黒光りのするものが出てきた。ドキッ。もしや黒ビニール袋？

人を呼ぶと、「そこまで！それ以上掘っちゃダメ」といわれた。黒い塊をそっと取ってドン・ルーペに手渡すと、「木炭だ」。ホッとするが、しかしなぜ地中に木炭が埋まっているのか？

牧草地にするために野焼した可能性はあるが、それが地中に埋まったのは、やはり掘り返されたせい？そのあと、茶色っぽい土も出てきたが、それも違う、という。結局、1.5mほど掘ったところで、ここは違うという結論に達し、埋め戻すことになった。残念。しかし、遺体が見つからない日が1か月ほど続き、毎日掘っては埋め戻してばかり、ということもしばしばだそうだ。

## 捜索犬キラ登場

サンタ・フェの発掘現場4日目、警察犬が登場。遺体発見のための専門の訓練を受けた犬で、名前は「キラ」。初対面なのに尻尾を振って寄って来てくれる、警察犬らしからぬ人懐こい女の子だ。能力は抜群で、たとえ10mの深さでも、臭いが出る穴や隙間さえあれば探知できるという。しかも、人体とほかの動物の死臭をかぎわけることができる。しかし、地面が完全にふさがっていると無理だという。

この日は午前中、あちこちに探查棒を打ち込み、地面に穴がたくさん開いたところで、いよいよ、キラの出番。



遺体捜索犬キラ。普段は甘えん坊だが、仕事となると表情が変わる

トレーナーの警察官が「探せ！」と指示すると、キラは足早に穴を次から次へと嗅いで回る。ときには、地面をひっ搔いて、くしゃみをしたりしたが、すぐに行ってしまう。15分ほど探しまわって、結局、キラの結論は、「ない」ということのようなだった。一同、がっかりして昼食に。

ところが、午後に現場に戻ると、キラが探した後の地面を、メンバーらが掘り返していた。「あれ、どうして？」と思ったが、警察犬は「ない」と判断したが、ドン・ルーペは「可能性は捨てきれない」というので掘っているのだという。その場所の発掘作業は翌日まで持ち越し、翌日の午後、深く掘った後で、結局、「やっぱりない」という判断に達した。無駄な汗水を流したことになってしまった。

それでも、私も一緒に作業をしているうちに、ドン・ルーペらの気持ちがわかるようになっていた。私にも、地中から、声が聞こえてくる気がしていたのだ。

「ここにいるんだ。早く、出してくれ」と。探さずにいると、その人は永遠に土中に埋まったまま、忘れられてしまう。ほかに誰も探してくれる人はいないのだ。失われた尊いものを、たとえ形骸だけになっても、家族の元に戻してあげたい。たとえ1%でも可能性があるなら、力を尽くして探さなくてはならない。おそらくその思いが、その場にいる人たちに共有されているのだ。だから、結果的に無駄な労力を費やすことになっても、そのことで不平を言う人はいない。

(次号に続く)

中米ニカラグアのカリブ海側地域は、国土面積の半分を占め、森林、鉱山、海洋資源に恵まれている。1987年から南北二つの自治地域となっており、北部自治地域（RACCN）は先住民族であるミスキート人、マヤグナ人が住んできた。南部自治地域（RACCS）はアフリカ系の人々が多い。

その北部自治地域、ホンジュラスと自然国境になっているココ川（リオココ）に面したワspan市で、2017年10月16日から3日間、リオココ先住民女性フォーラムが開催された。主催したのは、ワspanで長年活動をしている先住民女性組織ワンキ・タグニ（ミスキート語で「リオココの花」の意）だ。今回で9回目である。

このフォーラムは、リオココ一帯の女性たちが集まり、自分たちが抱える問題を可視化・共有し、その解決に向けてアクションを起こそうと始まったものだ。最初は、女性だけの参加だったが、現在はコミュニティの役職者（ウィッタと呼ばれる慣習法の判事、シンディコと呼ばれる土地・資源の担当者など男性が多い）なども参加してもらうようになっている。

フォーラムは、ワspan郡にある115のコミュニティ（7つの先住民族テリトリー）から1,000人以上が参加して、行われた。コミュニティは、リオココ沿いにあるところと、川から内陸部に入った所にあるところがある。もっとも遠いコミュニティから来るためには、片道4日もかかるということだ。

ほかに、北部自治議会や自治政府の代表、関連各省庁の代表などもフォーラムに参加する。交通費だけでなく、参加者が家を出てから帰るまでの食事や宿泊などの費用をすべてカバーしなければならない。そのため、ロジスティックスは本当に大変だったようだ。このフォーラムを一回開くための費用は、200万コルドバ（約730万円）もかかるということだ。

初日、続々と到着する参加者たちが会場であるスタジアムへ集合し、夕方に開会式が行われた。その後、まずテリトリーごとの代表が、去年からの活動について報告した。



フォーラムのオープニング



自治政府と自治議会の代表らによるスピーチ



二日目 マヤグナの伝統衣装でダンス

二日目は、RACCN自治議会議長と自治政府コーディネーターが参加して挨拶を行った。コミュニティの人々の要求に応えるべく努力していることなどを報告した。ミスキートとマヤグナの人々の音楽やダンスが披露された後、参加者はテーマ別のワークショップにわかれて討論を行った。ワークショップでは、人権と女性、環境正義、性と生殖の権利、精神性、子ども、若者、人身売買、フード・セキュリティ、教育とテクノロジー、保健と衛生など、14のテーマについて討論が行われた。



ワークショップの発表



全体会議

三日目は、午前中ワークショップを続け、午後は総会で、各ワークショップの結果を報告しあってから、ワスパンの町を行進した。その後で、第9回リオココ先住民女性フォーラム宣言を出して終了した。

女性たちの参加の様子を見ると、誰もが物怖じせず堂々と、いろいろな主張や要求をしていて、とてもエンパワーメントされている様子が見て取れた。ワンキ・タグニのこれまでの活動の成果と言えよう。自分たちの要求をどのように実現していくかを話し合い、自治地域議会・政府や関連省庁へのロビーイングも行うようになってきた。

リオココ沿いのコミュニティといっても、下流と上流の状況は異なる。内陸部のコミュニティにも独自の問題がある。例えば、下流では大雨になると水害が起こるし、若い女性が拉致される問題、麻薬の問題も多い。上流地帯や内陸部では太平洋岸からコミュニティの土地に違法入植するメスティソの人たちの問題と、それに伴う森林伐採が深刻だ。リオココの水の汚染問題もある。学校や保健所、船着き場など基本的なインフラが整備されていないこともある。

これらの問題はコミュニティ全般への影響だけでなく、とりわけ女性への負担という形であらわれることが多い。例えば、ワスパン市では人口流入に伴う木の伐採で水源が枯渇する問題があり、そのために女性は遠くまで水

を汲みに行く、あるいは洗濯しに行かなければならない。行き帰りの途中で襲われたりレイプされたりする事件も起きている。簡単に解決できない問題も多いが、その解決に向けて組織された女性たちが歩み始めている。

遠く離れたコミュニティに住んでいる女性たちは、このフォーラム以外には村を出る機会もない。そのため、彼女たちは、毎年、フォーラムに参加することを本当に楽しみにしているのだという。

フォーラムの期間中、昼間は議論をしているが、夜になると、音楽が流され、皆ダンスをして楽しむ。ふだん娯楽が少ない女性たちにとってはこれも貴重な時間だ。

このように、フォーラムはいろいろな意味でリオココに住む人々にとって非常に重要なイベントになっているのである。

## 第9回リオココ先住民女性フォーラム宣言 (要旨)

私たちは、勇気と愛と希望を持って、私たちと家族、私たちのコミュニティにとってより良い生活ができるように、このフォーラムに集まりました。私たちリオココの子どもたちは、すべての住民が平和に共存できるコミュニティを作り上げるために集まり、話し合ったのです。

私たちの現実とニーズに立って、同胞である北部自治地域の政府や議会の人々に、私たちの声で訴えました。そして、私たちのコミュニティの生活を良くするため、そしてガバナンスを強化するために活動を続けます。

保健、教育、生産の向上、話し合いによる土地問題の解決など、より緊急の課題を分析し、そのために、私たちがすべきことを確認します。

フォーラムは、対話と交流、熟考の場であり、共同の提案を作り上げる基盤なのです。そして、それは自治と文化間民主主義の実践にほかなりません。私たちは、これからも問題を可視化し、私たちの権利を守るためのメカニズムを探し、そのための同盟を作り、そして精神的、経済的、政治的、技術的、文化的なエンパワーメントを続けていきます。

ペルー:

## 私たちの要求を体現するアフリカ系の代表者が必要 アフリカ系活動家、モニカ・カリージョ、インタビュー

大西裕子訳

モニカ・カリージョは、リマの南にあるチンチャの小学校の教師だった父親の影響を受けて、幼いころからマーチン・ルーサー・キング牧師やネルソン・マンデラ大統領のような人物を尊敬して育った。この影響で、2001年、彼女が20歳の時に、ペルーのアフリカ系住民の権利のために闘う組織、アフリカ系ペルー人についての研究・啓発センター(LUNDU)を設立した。リマの国立サンマルコス中央大学で社会コミュニケーションを学び、その後、英国のオックスフォード大学で国際法を専攻した。現在はニューヨークに住み、アフリカ系ラティーノコミュニティ支援のためのプロジェクトで活動しながら、パフォーマンス、アート、相互メディアの修士課程で学んでいる。以下はそのインタビューである。

**アフリカ系ペルー人の現在の主な要求は何でしょうか？**

三点あります。第一は、性暴力に関することです。人種によって異なる状況を知り、どれだけのアフリカ系の女性が性暴力の被害にあっているかを認識することが重要です。女性と社会的弱者の省は、この点を考慮して人種別に対応するようになりました。しかし、理想的なのは、警察、検察庁、青少年保護局(DEMUNA)のような機関でも、同様に対応するということです。とりわけDEMUNAは多くの女性たちが訴え出るところなので。

第二は人種差別的な侮辱を処罰の対象にするということです。反差別法は不十分であり、先例となるような道徳的な、あるいは懲罰的な罰則規定はないのです。

第三は、人種差別的な侮辱や言葉を許すことで性暴力もエスカレートするということが人々はもっと認識すべきであるということです。LUNDUで集めた情報の中に、多くの女性が肉体的な暴力を受けているだけでなく、

人種的にも侮辱されているという報告がありますが、これは彼女たちのおかれている立場が一層弱くなるということを意味しています。

**去る2016年7月、「アフリカ系ペルー人の国家的発展計画2016—2020」が承認されました。この計画をどう思いますか？**

現在、教育省はアフリカ系ペルー人の歴史に関する教材を発行し、アフリカ系の学生に奨学金を出して支援しています。この点では進展はあるのですが、学校での人種的ないじめに関してはさらに強く対処する必要があります。というのは、学校は社会性を身につける最初の場所だからです。ですから、いじめを放置し、それを正すための対策をとらない学校には処罰を与えなければなりません。ちなみに、いじめ対策法〔2011年承認〕は、子どもの自殺がきっかけで作られましたが、そのうちの2例はアンデス出身の子どもだったと思います。

一方、世界保健機構は、貧血2型、糖尿病2型、高血圧などのような病気は、アフリカ系の人々がアメリカ大陸に連れてこられたことと関係があるとしています。アフリカ系ペルー人アーティストのラファエル・サンタ・クルス、ペペ・バスケス、アルトゥーロ“サンボ”カベロ、ルチャ・レイエスは、まさにこれらの病気です。このことから、保健省は、登録患者のカルテに人種欄を追加しました。このカルテは、患者が公立病院に行った時に作成されるものですが、活用されていません。というのも病院の職員が作成能力に欠けているだけでなく、ただ余計な仕事が増えるという認識しかないからです。

**2017年の国勢調査では、アルゼンチンが2005年に行ったように、エスニックアイデンティティについての自己認識に関する質問が**

予定されています。ペルーのような国で、アフリカ系住民として自らを認識することはどのような意味がありますか？

ここまで到達したこと自体が、長年の活動の成果です。ラテンアメリカでは、2002年にある国の国勢調査でエスニックアイデンティティの欄を設けたことが始まりですが、ペルーではこれは重要な進歩です。1940年以来、アフリカ系住民として国勢調査に現れてこなかったのですから。もっとも、それが、アフリカ系住民が自らを認識することの重要性に気づくことにつながるかは、まだわかりません。それでも、このことはすべての保健制度や教育制度がアフリカ系住民についての情報を有するということにつながります。

あなたは、ラテンアメリカにおけるアフリカ系住民の状況をどのように見えていますか？進歩している？それとも後退していると思えますか？

アンデス共同体のような枠組は重要です。そこでの決定を参加国が自国の法律に反映させるためのメカニズムがあるからです。政府がアフリカ系住民の福祉についても、法を制定するように、アンデス共同体の議会を強化しなければなりません。アンドレス・ベジョ協定があるので、保健の分野で議定することができます。これは私たちの法律が、質的にも量的にも飛躍するために有益でしょう。

世界的にはどうですか？

国連は、奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられた人たちだけでなく、ほかの大陸に住んでいるアフリカ系の人々、あるいは当のアフリカ大陸のアフリカ人も含めて、その生活の質の向上を目指し監視する目的で、一昨年「アフリカ系の人々のための国際の10年」を始めました。一方、米国ではアフリカ系ラティーノがアフリカ系住民の活動の中に入って行くことは難しいのです。というのは、私たちはただラテン系としか見られていないからです。だからこそ、アフリカ系という共通の概念を

強調しなければなりません。同時に、ラテン系のアイデンティティを確立する権利も守られなければなりません。私はアンデス地域の出身で、アフリカ系カリブ人とは異なる文化や習慣を受け継いでいます。でも、お互いに共通点を見出すことができるし、そこからさらなる対話も生まれます。

さらに、2010年に、LUNDUと共にラティーノというテレビ局を相手取り、そこが放映していた番組の“ネグロ・ママ”〔アフリカ系ペルー人を侮辱するステレオタイプ〕というキャラクターについて提訴し、罰金刑を課すことができました。この経験に基づき、現在、米国において、ラテンアメリカでのこのようなステレオタイプの表現をチェックするアフリカ系ラティーノ監視所の活動をしています。

アフリカ系の大統領を持つことは、米国のオバマ政権が示しているように、必ずしも進歩を保証するものでないのは確かですが、ペルーで、アフリカ系の政府高官や大統領が出るのはいつになるのでしょうか。

アフリカ系住民の代表者が出ることは重要なことです。しかしこの代表者は私たちの要求を体現しなければなりません。アフリカ系だからといって、罪を犯さないとか、人権を侵害する議案に応じないという事を意味するわけではありません。ペルーでは、スポーツやアートの分野で秀でている多くのアフリカ系の人たちが、国会議員になっています。それ自体は悪いことではありませんが、せっかくそういう場所においても、アフリカ系住民の訴えや要求に結び付くことはなかったのです。

もう一つの問題は機会についてです。政治家になるには、必ずしも大学に行かなくてはならないわけではありません。しかし、競争が激しく、基準も高い状況の中では、高等教育を受けることができなければ、可能性は制限されます。文化省の統計では、10年前までは高等教育を受けられるアフリカ系住民はわずか2%でした。現在、状況は良くなっているでしょうが、まだまだハードルは高いのです。Noticias Aliadas: Afrodescendientes en América Latina y el Caribe 31/05/2016 より

# 種子—みんなのもの？それとも企業の所有物？

印鑰 智哉

ラテンアメリカの国々を通称モンサント法案が駆け抜けた。モンサント法案とは、農民の種子の権利を奪い、毎回、政府に登録された種子を買わなければ農業ができなくするものだ。もし、種子を買わずに自分が保存した種子を使って栽培すれば、最悪の場合、犯罪者として捕まり、収穫物も売ることができずに没収されることになる。世界で種子企業をもっとも買収し、市場に大きなシェアを持つモンサントを利するものとしてモンサント法案と呼ばれている。

しかし、収穫物の中から次の耕作のために種子を取っておくということは古来、どこでも行われてきたことだ。それが犯罪にされるということなんてありえないだろうと思われるかもしれない。残念ながら、この動きは現在、ラテンアメリカだけではなく、アジア、アフリカ、欧米でも、そして日本でも進んでいる。日本でも企業の知的所有権のある種子を保存したり、他の人と共有したりすればそれは種苗法違反となる。昨年大きな反対の中で成立した共謀罪でも種苗法は対象となっている。種苗法は企業の知的所有権を守るための法律である。

一方、日本ではコメ、大豆、麦に限られるが、その種子の生産と供給を義務付け、優良品種の開発を国の責務とした法律、主要農作物種子法が存在しており、農家は安価な価格で質の高い種子を手に入れることが権利として保障されていた。しかし、この法律が民間企業の利益を損なうとして、その廃止が昨年4月に決まってしまった。今年の4月以降、主要農作物種子法は廃止されてしまう。

この世界で進んでいる農家の種子の権利を奪う動きの背景には、モンサントなどの種子企業が、知的所有権をたてにして、開発した種子を独占し、世界の農家に押しつけようとする企てがある。種子は企業の独占物となり、農家は企業の富を増やすだけの契約労働者の地位に落とされる。こうした独占の動きに対して、企業の独占物ではない、自分たちの種子を

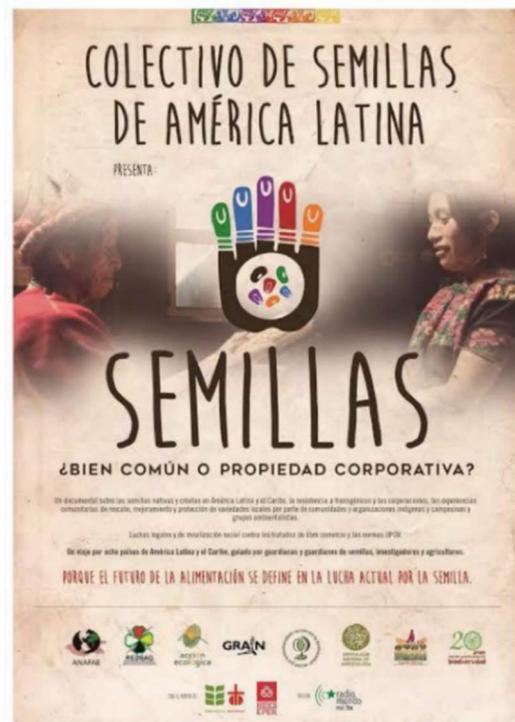
守ろうという動きが世界で本格的に動き出している。

Radio Mundo Real という NGO が制作したドキュメンタリー映画『種子—みんなのもの？それとも企業の所有物？』（原題 SEMILLAS ¿Bien común o propiedad corporativa?）はコロンビア、グアテマラ、コスタリカ、チリ、ブラジルなどの国々の農民運動に密着しながら、このモンサント法案との闘いや先住民族や農家の種子の権利を守る運動の重要性を表す作品となっている。

今回、筆者とアジア太平洋資料センター（PARC）の共同プロジェクトとして、この日本語版を制作することを企画し、クラウドファンディングを実施。目標を大幅に上回る支援をいただき、3月上旬完成をめざして現在制作最終段階に入っている。この日本語版の後には、日本での主要農作物種子法廃止問題を含めた解説編も付けた。ラテンアメリカの状況を知る上でも、種子のグローバルな問題を知る上でもぜひ、ご活用いただきたい。

詳細

<http://www.parc-jp.org/video/sakuhin/semillas.html>



## フィデル・カストロは独裁者か

キューバ革命の最高指導者フィデル・カストロ (1926~2016 年) の死去 1 周年を記念するセミナリオ (研究発表会) が、祥月命日 11 月 25 日に先立つ 2017 年 11 月 17 日、東京・西麻布の「ラ米サロン」で催された。キューバからは、歴史学博士で国家評議会歴史局員のエリエル・ラミーレス (「フィデルと対米紛争」)、外交政策調査所員で大使級外交官のペドロ・モンソン (「私見; フィデルの人間性」)、歴史学博士で大使級外交官のカルロス・アルスガライ (「フィデルとキューバ外交政策の革命的变化」) が出席。日本側は、ラ米研究所員の新藤通弘 (「キューバ革命の外交政策; フィデル思想の有効性」)、元キューバ駐在大使の馬淵睦夫 (「カストロ議長の思い出」)、ジャーナリストの伊高浩昭 (「独裁者か?—ジャーナリストが見たフィデル」) だった。

各自の持ち時間は 40 分、日西両語で発表、質疑応答やカルロス・ペレイラ駐日大使の開・閉会挨拶もあって、午後 1 時から 6 時までの 5 時間に及ぶ長い会合となった。非公開で、傍聴したのは、ベネズエラとニカラグアの駐日大使、大学のラ米研究者、映画プロデューサーら約 20 人の招待者だけだった。報道陣はいなかった。

キューバ人 3 人は予想通り、当たり障りのない話をした。死んだとはいえ、革命の父フィデルを論難することなど、政府関係者 3 人に許されるはずがない。私以外の日本人 2 人の話も穏便な内容だった。キューバ大使館主催の会合だから、ごく当たり前の成り行きだった。この種の会合では、「節度」こそ重要なのだが、私は敢えて、やや挑発的な演題のもとに語った。それは発表者 6 人中、唯一のジャーナリストとして果たすべき責任であり、行使すべき権利だと認識してのことだった。キューバ人らの間で多少、物議を醸した。私の発言の骨子は以下の通り。

一つ、私は大学生だった 1962 年に起きた「キューバ核ミサイル危機」以来、キューバ情

勢を観察してきた。フィデルは半世紀余り「強迫観念」として私の脳裡を占めていた。

一、国際社会の保守・右翼勢力や半可通のジャーナリストらは、「ポスト・トゥルース」期に乗じるがごとく、フィデルを独裁者呼ばわりしている。悪意ないし勉強不足に依る。ベネズエラのニコラス・マドゥーロ大統領もその犠牲者だ。フィデルと親しかったスペイン人ジャーナリスト、イグナシオ・ラモネーも責められ、幾つかの職場を奪われた。歿後 50 年を経たチェ・ゲバラも、とぼっちを受け、右翼から「虐殺者」呼ばわりされている。

一、フィデルの独裁性については、腐敗し残忍非道な数ある諸国の独裁者と同列同等に扱うべきではない。フィデルがラ米および第 3 世界の解放闘争に及ぼした貢献や、キューバにとって絶対的だった米国の存在を相対化した功績を認めなければならない。

一、フィデルは「政治的動物」であり「希代の権謀術数家」だったと思う。この革命家をまっとうに評価するには、体制安定化のための国論形成に利用された可能性のある 1989 年 7 月のオチョア将軍らへの銃殺刑執行、および 1998 年の「5 人の英雄」事件などの真相解明が不可欠だ。キューバの皆さんに時間をかけてフィデルを分析し、確乎たるフィデル像を打ち立ててほしい。それは皆さんの義務・責任であり、特権でもある。

一、フィデルもいずれはキューバで「公式な批判」の対象になるだろう。ソ連独裁者スターリンは死後 3 年、ロシア革命後 39 年で厳しく批判された。私は将来、フィデルはスターリンのようにではなく、「大躍進」や「文化大革命」で非難されながらも、中国共産党と現代中国の始祖として讃えられている毛沢東のような地位を得るのではないかと思う。

## フレディ・グスマン、ジャズとアンデス音楽の彼方

この秋に一人の若手ペルー人ギタリストと知り合った。アメリカのバークレーでジャズを学んだギタリストだが、ある時、ラウル・ガルシア・サラテの演奏を聴き、自らの故郷の音楽の奥深さに衝撃を受け、以後3年間アンデスの山村を巡りながら土地の人々と交流し、それぞれの土地の音楽を学びながら、ジャズとアンデス音楽の両者を自由な発想で結びつけ新しい「アンデス音楽」のあり方を模索しているという新進気鋭のミュージシャンである。

(※悲しいことに、ペルーで最も有名なアンデス・ギタリストであったラウル・ガルシア・サラテは2017年10月末に亡くなってしまった!)

私をはじめ彼のことを耳にしたのは、友人が某大使館のイベントで彼の演奏を聴いて非常に面白かったから会ってみたいか、というお話だった。結局、日程の調整が合わずその時は流れたが、また別の友人から同様の話をいただき、なんとか無事彼に会うことができた。

彼のことを聞いて、まずYouTubeで彼を検索し、演奏を見てみた。すると、アヤクーチョやクスコ近郊のローカルなアンデス音楽を現地の音楽家たちと演奏しているかと思えば、アヤクーチョのハサミ踊りといっしょにギターで演奏していて、それをクスコのバンドウリア奏者がケチュア語で囃し立てるといふような、非常にオリジナリティあふれる新しいスタイルのアンデス音楽をやっている、独自の音楽世界を模索している面白い人だなあというものが第一印象だった。

そして、いざ実際にフレディ・グスマンに会ってみると、彼は非常に気さくな若者で、今もなお自分の音楽性をどの方向で作っていくべきか悩みながら、演奏活動を行っている音楽青年だった。彼は、日本は今自分にとって非常に面白い場所なので、日本語学校に断続的に通いながらしばらく拠点の一つとして活動したいと思っていると語っていた。



フレディ・グスマン

11月には新宿のカフェ・ラバンデリアで日本初となるソロライブを行い、ディープなワイノやアヤクーチョの生活歌に挑戦的なジャズのエッセンスをぶつけながら披露し、大きな喝采を浴びた。実際、英語、スペイン語、そしてケチュア語の歌を歌いながらギターを弾き、たまに日本語を織り交ぜながら自分の情熱をギター一本で披露したこのコンサートは、彼の人の良さ、音楽への愛情、そして伝統へのリスペクトが感じられる素晴らしいものであった。

ペルーのアンデス南部、クスコとアンダウィラス、そして中部のワンカーヨ出身の祖父母をルーツに持つ彼は、幼いころに両親に連れられて首都のリマに出てきた。当時、家族のパーティでは、父方の祖父がいつもギターを弾いていた。幼い頃のフレディはそれを一緒に歌うのが好きだった。彼は5歳からバイオリンやマンドリンを始め、やがてギターを弾くようになった。

ところが小学校の時、母がアメリカ人と再婚してアメリカへと移住することとなった。新しい父は1960年代から1970年代のロックが大好きだった。その影響を受けてロックを聴くようになり、彼の興味は次第にブルースへと移っていった。それはきっとブルースの持つ「センチメント」と、生活の中から生まれてきた民衆音楽としての魅力に惹かれたのだろうとフレディは語る。

ブルースにのめり込む中で、更に彼はジャズと出会った。ちょうど大学に入る直前ぐらいだったという。そこからジャズを聴くようになり、大学時代にはジャズの作曲を試みるようになった。

転機となったのは大学3年生の時だったと彼は語る。その時フレディは初めてラウル・ガルシア・サラテの演奏するアンデス・ギターを聴き、大きな衝撃を受けた。自分の子供時代を思い出し、自分の故郷であるペルーについて考えるようになったという。

一気にペルー音楽に心奪われたフレディは、ラウル・ガルシア・サラテの演奏をコピーしようと楽譜に起こしてギターの練習を始めた。大学を卒業した彼はニューヨークへと移り、バークレー校で学んだ。

そこで同じクラスになった西アフリカのベナン出身のギタリスト、リオネル・ルエケに刺激を受け、そんな彼からのフレディへのアンデスのルーツ音楽とジャズの融合させた独自の音楽をもっと突き詰めたら面白いと思うという言葉に後押しされ、ペルーに戻ってもっとしっかりと学ぶことを決意した。

ペルーに戻った彼は、アヤクーチョを代表するバイオリン奏者であるチマンゴにより深くアンデス音楽について学びたいと相談したところ、それには現地に行かなければ話にならないと人を紹介してもらい、以来アヤクーチョを中心にアンデス山中に通いつめ、さまざまな音楽家たちと音楽を共に奏で、学ぶ日々が続いた。

そんな彼の今までの活動を一つの形にしようとしたアルバムが「ワイジャズ(Waijazz)」だ。ニューヨークで学んだジャズの世界と、彼が没入したアンデス深部の音楽がどのような形で融合するのか、その試行錯誤が形となった作品だ。

今や世界的にも注目されるギタリストとなった友人のリオネル・ルエケにも友情出演してもらい、ペルーからもそうそうたるメンバーが参集した。ウィリアン・ルナ、カルロス・モスケダら人気歌手に加え、ジャズ・フラメンコ・ギタリストのエルネスト・エルモサ、ベースのマリアノ・リイ、そしてバイオリンのチマンゴとマリア・エレナ・パチェコ、そしてアル

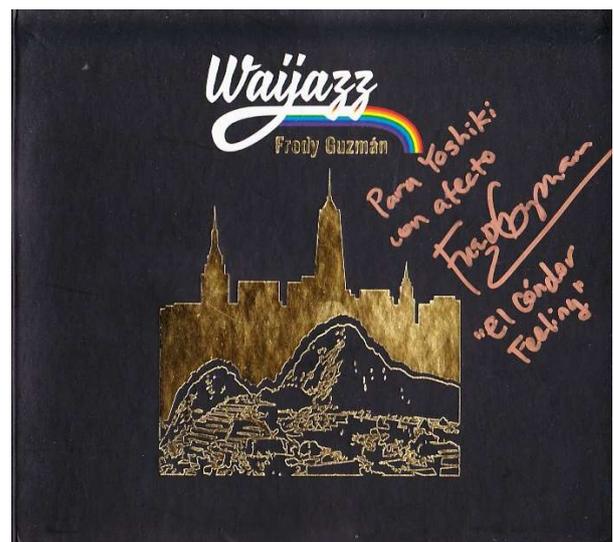
パのルシアノ・キスペと、綺羅星のようなメンバーが、彼の作品にゲスト出演している。

このアルバムの中では、ジャズより、ワイノよりと、それぞれ軸足を変えつつさまざまな試行錯誤を重ねた楽曲はどれも聴き応えがある。英語、スペイン語、ケチュア語の3言語を往還しながら歌われる歌は、複雑に劇的に変化していく音楽に載せて、軽やかに紡がれる。

そんな渾身の作品を経て、彼は新しくワイジャズの名を冠した音楽ユニットを結成、ライブ活動の展開を始めた。メンバーはアヤクーチョの音楽家を中心にクスコの盟友ホルヘ・チョケウィルカも加えた編成で、ペルー国内だけでなく近隣諸国でもツアーを行い高い評価を受けている。

しかし、彼は、今の自分の一番の興味は、よりダンサブルな音楽への接近なのだと語る。ニューヨークにいた頃には感じなかったが、アンデス世界にどっぷりと浸かるようになって、いかに人々の生活の中に踊りが重要な要素として息づいているのかをひしひしと感じた。ジャズは好きだけど、とにかく今はもっと踊れる音楽をやってみたい。その中で新しい方向性を見つけていきたいと思っている、とフレディは熱く語っていた。

まだまだ日本はもちろんアメリカでも、そしてペルーでも無名な新進気鋭のギタリスト、フレディ・グスマンは、これからが楽しみな音楽家の一人である。



アルバム ワイジャズ(Wai jazz)

あけましておめでとうございます。

寒いこの時期は熱いスープに限ります。メキシコ料理の定番の材料トウモロコシをベースにしたスープを紹介します。

メキシコでは、アステカやマヤ、さらに昔のオルメカ人たちも、トウモロコシを食べており、それぞれの地方に、その地方独特のトウモロコシ料理が伝わっています。

きょうは、elote、つまり実が軸についたままのトウモロコシを使います。elote は、トウモロコシのやわらかい穂軸を意味するナウアトウル語のelotl に由来します。

アステカやマヤの時代には、トマトや塩、achiote (ベニノキ)、メキシコ原産の豚肉、七面鳥などの鳥の肉も使っていました。

ユカタンには、世界中のどこにもいない在来種のブタ (cerdo pelón) が生息しています。



スペイン人の到来によって、コショウやニンジン、クミンが材料に加わりました。

このスープは辛くなくて日本人の舌にもあうので、私も日本でよくつくります。フランスパンやごはんともよく合いますよ。

.....

■材料 4人分

- ・トウモロコシ1本 (生でも、真空パックでも可)
- ・豚肉薄切り (細長く切る) 400グラム
- ・ニンジン 中 1本
- ・タマネギ 小 1個
- ・トマト 中 4個
- ・トマトピューレ 100グラム
- ・塩
- ・コショウ
- ・粉末のクミン (2つまみ)
- ・水 (6カップ)

■作り方

- 1) トマトをミキサーにかけやすい大きさに切る。

- 2) タマネギの皮をむいて4等分する。
- 3) 生のトウモロコシを使うなら、皮とヒゲを取り除き、4等分する。
- 4) ニンジンの皮をむき、2センチ角に切る。
- 5) 豚肉は食べやすいように3センチほどの長さに切る。
- 6) トマトとタマネギ、トマトピューレ、塩(お好み)、粉末クミン(2つまみ)、水(3カップ)をミキサーにかける。
- 7) ソースパンか鍋で、肉を軽く炒めたあと、ミキサーにかけた材料を加える。
- 8) ニンジンを加える。
- 9) トウモロコシも加える。
- 10) 水(3カップ)を加えて弱火にかける。スープのとろみは水の量で調整する。

## (1) LAにショッピング・モール急増

リサン小売業アドバイザーの調査によると、LA 諸国の敷地面積 1 万平方キロ以上のショッピング・モールの数は、2017 年頭で約 1,900 とされる。2014 年末は 1,555 だったので、2 年で 2 割増加したことになる。2016 年だけで LA 諸国で約 100 の施設が建設されている。上位は、メキシコ (650 件)、ブラジル (600 件)、コロンビア (210 件) の 3 カ国で、次いでアルゼンチン、チリ、ペルーとなっている。2025 年には 2355 件に増加すると予測されている。

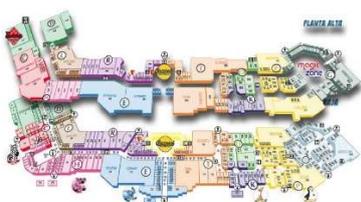
一方、2006 年以降、米国のモール建設は皆無に近く、現存 1,100 施設の 25% は 2022 年までに閉鎖が予測されている。北米と対照的な LA 諸国での増加の背景には、購買力をもつ中間層拡大 (約 30%) がある。もう一つは、リーマンショックを契機に、ショッピング・モール関連企業、デベロッパー、投資家が、LA 諸国に新しい可能性を見出したことである。

忘れてならないのが、都市環境の劣悪さ、犯罪率の高さという要因である。LA 諸国のショッピング・モールは、食料・衣料・雑貨・インテリアなどの小売店が主体で、飲食店、映画館などの娯楽施設、スポーツジム・健康施設、病院、事務所など多様な業種が参入している。アパートやコンドミニアム付きも増えてきている。犯罪発生率の高い都市で、ショッピング・モールは、中間層にとって安心安全な購買活動ができる空間となっている。

LA 諸国で敷地面積最大のショッピング・モールは、パナマ運河の米空軍基地跡に建設されたアルブルック・モール (38 万㎡) で、2 位はコロンビア・ボゴタ市のサンタフェ (25 万㎡) とされる。



グアテマラ市オクランド・モール



パナマ市アルブルック・モール  
商店配置図

### 主要出典

<http://www.bbc.com/mundo/noticias-42187615>

## (2) 2017年の主要環境レポート

国際環境NGOであるMongabay Latamは、環境に関するレポートで、2017年度によく読まれた上位の10点を紹介している (下表参照)。

10	TIPNIS、ボリビア先住民、政府決定による消滅危機
9	ウカヤリの森、ペルーにおける土地取引の戦利品
8	ボリビア先住民カビネーニョ、石油開発による生活変容
7	エクアドル・アマゾン地域の共同体、巨大ダム建設による水産資源減少を告発
6	コロンビア、FARC撤退にともなうアマゾン自然保護区緩衝地域の破壊
5	アマゾン低地、7種の希少動物種の絶滅危機
4	メキシコ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの過剰な鉱山開発
3	メキシコ、グアテマラ、ニカラグア、コロンビア、エクアドル、ペルーのアフリカ椰子の静かなる拡張
2	脅かされる環境活動家
1	グアテマラ、ニカラグア、パナマの家畜飼養の拡張

2位の環境活動家に対する脅迫に関しては、159号で紹介したホンジュラスのベルタ・カセレス殺害、ペルーのマクシマ・アクーニャ迫害の事例以外に、①ニカラグア運河建設に反対する農民指導者への脅迫、②メキシコ・バハカリフォルニアのリゾート開発反対運動の弁護士投獄、③コロンビア・チョコ地方の違法鉱山開発反対の住民審議会、④グアテマラ・イサバル県の家畜飼養会社を反対するケクチ先住民指導者ロドリゴ・トート (2017年ゴールドマン賞受賞)、⑤エクアドル・アマゾン地域先住民シュアル指導者の投獄、⑥ペルー・マドレデディオス県国立公園の森林保護活動家への脅迫、⑦ボリビア・TIPNIS防衛の環境活動家の事例が紹介されている。

1位の中米の家畜飼養拡大では、グアテマラのラグナ・ティグレ国立公園の秘密滑走路建設や森林火災の背後にある家畜飼養拡大、ニカラグア南部インディオ・マイス保護区、南東部生物保護区、カリブ岸ボサワス森林保護区の家畜飼養にともなう環境破壊、パナマのダリエン国立公園の家畜飼養拡大の事例が紹介されている。

### 主要出典

<https://es.mongabay.com/2017/12/latinoamerica-los-10-reportajes-mas-importantes-del-2017/>

### (3) マリチュイ、大統領選挙候補登録

全国先住民議会（CNI）傘下にある先住民組織が5月に設立した先住民統治議会（CIG）の広報官に就任したマリア・デ・ヘスス・パトリシオ（愛称マリチュイ）は、10月初めに全国選挙庁（INE）に大統領選挙の独立候補申請を提出した。独立候補として正式に登録されるには、120日以内（2月12日）に17州以上で有権者の1%（約86万）の署名を集める必要がある。

しかし、INE 開発のアプリ搭載のスマホで署名を集めるという方式では、国内貧困地区での手書き署名が認められたものの、インターネット環境の不備を考えれば、農村部を基盤とする候補の署名確保は困難であることは署名運動開始の時点で予想されていた。

11月初旬から12月末まで、広報官マリチュイと女性統治議会代議員で構成されるキャンペーン隊は、国内19州の約60カ所を訪問した。このキャンペーンは、独立候補登録に必要な署名収集という短期的視野の運動ではない。CIG 創設集会時に代議員を選出できなかった先住民居住地域などを歴訪し、巨大開発計画の強制で先住民共同体を破壊・略奪している「上の世界」の政治に終止符を打つための組織づくりを呼びかけることがキャンペーンの主目的だった。1月には北西部のソノラ、シナロア、ナヤリー州訪問が予定されている。CNI 傘下の先住民運動組織が多いオアハカ、ゲレロ、ミチョアカン州の訪問はその後と予想される。CIG による組織化の呼び掛けは、先住民族だけでなく、多様な層に向けられている。メキシコ市 UNAM 集会には3千人近くが参集し、プエブラ州の集会では LGBT の参集も見られた。

2018年1月8日時点で、署名獲得率166%のヌエボレオン州知事ハイメ・ロドリゲス・カルデロンと獲得率107%の元大統領カルデロン夫人マルガリータ・サバラは、今後の照合待ちとはいえ、独立候補登録はほぼ確実である。マリチュイの獲得率は16%で、期限内達成の可能性は少ない。CIGのキャンペーンは、空約束を乱発する選挙キャンペーンではなく、2018年という短期的視野を超え、抵抗する共同体の組織化を呼びかけ続けるものである。

**主要出典** <https://www.congresonacionalindigena.org/category/el-andar-del-cig-y-marichuy/>

### (4) オデブレヒト社疑獄

ブラジルのゼネコン企業オデブレヒト社 CEO マルセロ・オデブレヒトが LA 諸国の政治家に賄賂を配っていたことを表明したのは、一年前の12月だった。現時点で判明している賄賂の金額は下表のとおりである。

国名	万ドル	期間	嫌疑者
ブラジル	34,900	03~16	ルーラ、ルセフ、テメル
ベネズエラ	9,800	06~15	マドゥロ、カプリレス
ドミニカ	9,200	01~14	前公共事業相・通産相
パナマ	5,900	10~14	バレラ大統領、元大統領
アルゼンチン	3,500	07~14	前大統領・副大統領
エクアドル	3,350	07~16	グラス副大統領、キト元市長
ペルー	2,900	05~14	現・元大統領、ケイコ
コロンビア	2,700	09~14	サントス、ウリベ政権幹部
グアテマラ	1,800	13~15	ペレス前大統領ら
メキシコ	1,050	10~14	ペニャ・ニエト、Pemex幹部

エクアドル前副大統領グラスのように受託収賄罪で6年の刑が下された例もあるが、大半の国では本格的な調査や事実究明はあまり進展していない。震源のブラジルを除けば、もっとも大きく揺れ動いているのは、歴代大統領が当局の調査対象となっているペルーである。

2017年2月、元大統領2名に対する身柄拘束令が出された。選挙運動支援金300万ドル受領容疑の前大統領ウマラ（2011~16年）は、7月に夫人とともに出頭し身柄拘束状態にある。一方、2千万ドルの賄賂受領容疑の元大統領トレド（2001~06年）は、直前に米国に出国し、国際手配中である。

ペルー検察庁の聴取を受けたオデブレヒト氏の証言では、ケイコ・フジモリにも資金提供があったという。現大統領クチンスキには、トレド政権期にコンサルタント会社を通じ78万ドル以上の賄賂受領という嫌疑がかけられている。国会提出の罷免決議案は、12月21日の採決で最大野党内のケンジ・グループが、フジモリ元大統領の釈放と引き換えに反対票を投じたため、必要な票数に達せず採択されなかった。12月24日、クチンスキ大統領は、健康を理由にフジモリ元大統領に対する恩赦を発表した。年末の12月28日、クチンスキだけでなく、ケイコに対する検察庁聴聞が行われた。その嫌疑は2006、2011年の大統領選挙時のオデブレヒト社からの支援金受領である。

**主要出典** <http://www.bbc.com/news/world-latin-america-42451959>

昨年、レコムから多くのミッションを頂きました。159号から「ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み」を担当しています。ニュース選択に明確な基準はありませんが、地域的にもテーマ的にも偏らないようにしています。161号から編集を担当しています。引継ぎなしで、手探りで紙面を作っています。最初の号は表紙写真の選択を誤り、平和の白旗はモノクロ印刷で消えてしまいました。「高齢者」からの要望を踏まえ、フォントを大きく、字体も統一しました。三つめがレコムのfacebookのページ管理者です。自由に投稿できるはずですが、うまく投稿できないという話もあります。改善に知恵を貸していただければ幸いです。

小林致広 (むねひろ)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で、2018年4月14日(土)

発送作業は関西で、2018年4月21日(土)の予定です。

参加いただける方は、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで連絡ください。

Vol. 162 エルサルバドル 昔と今	Vol. 158 コロンビア・和平の陰の暴力
Vol. 161 コロンビア革命軍の最後	Vol. 157 ニカラグア・ワスパンの今
Vol. 160 サパティスタ・芸術と科学	Vol. 156 グアテマラ戦時下性暴力裁判
Vol. 159 グアテマラのアフリカ系	Vol. 155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ

#### メールリングリスト

レコムに入会(もしくは購読)すると、メールリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで、ご一報ください。メールリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

#### 会員の種類

☆会員	: 年 8,000 円	…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆学生会員	: 年 5,000 円	…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆賛助会員	: 年 10,000 円(一口)	…総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
☆購読会員	: 年 4,000 円	…『そんりさ』の購読、メールリングリスト参加可

#### レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15

太田方

TEL 075-862-2556 (留守電)

お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

ホームページ: <http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail : [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)

Facebook : <https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座: 00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協働ネットワーク

レコム口座 77万3247円

グアテマラ基金 130万0329円

(2018年1月現在)

そんりさ (SONRISA) 163号

2018年1月13日発行

日本ラテンアメリカ協働ネットワーク (RECOM)

定価 400円